

# 緊急特集 中越戦争と日本

## 覇権の連鎖反応

永井 社会主義諸国間には本来的にシビアナ「制裁原理」がある  
中嶋 一種の宗教戦争、だから紛争処理のルールが見つかからない  
矢野 覇権関係の無限連鎖が、武力行使の無限連鎖に変わっていく

### 「中国ベトナム侵攻」までの国際環境

矢野 こんどの中国のベトナム侵攻は、測り知れないほど大きな意味を持った出来事であると思います。まず、なぜ事態がここまで立ち至ったかというのですが、簡単に言って、アジアにおける国際関係が、いわば覇権関係の無限連鎖という特徴を持っていたということではないか。勢力均衡パワーストナランスでもなく、国際法的秩序もない。しかも、暗黙の覇権であるうちはいいんですが、この覇権関係の無限連鎖状況において武

力行使がいったん行なわれると、こんどは武力行使の無限連鎖に変わる。だからベトナムがカンボジアに侵攻すると中国はベトナムに侵攻しますし、ソ連の中国への武力威圧——モンゴル周辺か南シナ海が問題の領域だと思えますが——の危険が生ずる。その意味で、今回の出来事はアジアの、特に大陸部に成立している国際関係の質を暗示したと思います。具体的な契機、および事態のシークエンス(連鎖)を言いますと、最大の契機は昨年(1978)の八月に日中平和友好条約が締結されたことだ。この決断は、日本が歴史的に犯した最大の不注

座談会

永井なが陽よう之の助すけ  
中嶋なか嶺みね雄お  
矢野や野の  
暢とわら

(京都大学教授)

(東京外国語大学教授)

(東京工業大学教授)



永井陽之助氏



中嶋嶺雄氏



矢野暢氏

急な決断の一つであろうと思います。この日中平和友好条約の締結によって、微妙な積み木細工のようであったアジアの国際秩序がガタガタと崩れ始めた。日中条約の結果十一月三日のソ越友好協力条約の締結になり、ソ越条約が契機となつて米中正常化がにわかには早まる。そして米中正常化が原因となつてベトナムのカンボジア侵攻になり、それが中国のベトナム優攻になったという、契機の連続性。このきっかけを作つたのはまさに日中条約であつたと言えると思います。その後、一つの出来事がそれぞれ触媒的な役割を果たす形で、八分通り熟した状況を完全に熟させてしまふという事態が、連続してしまつたわけです。

ぐる中越紛争を越えた背景があるということですね。単なる国境紛争という限定された作戦行動としてなら、中国自身、今回の行動はかえつて自分の首を締めるということはある程度わかるはずですよ。にもかかわらず侵攻した。それはなぜか。これまでの対外戦略で中国が一番重視していた領域は、対アジア関係、アジア周辺諸国、当面はインドシナ半島とASEAN(東南アジア諸国連合)、ひいては第三世界といわれるところ、これなんです。この中国の最も重要な土俵の中で、この一年間、特にこの半年ほど、中国は非常な外交的挫折を味わつている。ベトナムのカンボジア侵攻に対して、中国はなんらなし得なかつた。その無力というものが、中国に対するクレディビリティ(信頼)を失わせている。中国離れが出てきたわけですね。これ以上何もできなかつたということになると、ますます中国は信用がなくなる。日中、日米という座標軸で見ると、中国の外交的威信は高

まっているかのような幻想を与えているし、ある意味ではそうかも知れませんが、肝心の中国の重要舞台であるアジア周辺諸国において、中国の影響力は減退している。

つまり、中国は非常にデスペレートな状態の中で軍事行動に走っている。鄧小平はアメリカや日本を行脚して、米中、日中という背景を一つの資産として、「制裁」という高飛車なことを言ったと思うんです。しかし、ワシントンも東京も、ベトナムに「制裁」を加えることに対しては賛成しなかった。このことは逆に鄧小平を苛立たせたのではないかという気がする。純軍事的に見ると非常にばかげたことをやっているわけですが、それをやらざるを得なかったところに中国のあせりがみられると思います。

それからもう一言。にもかかわらず、そういう文脈の中においてみても中国にとって大きなジレンマがある。つまりポル・ポト政権をどこまで摺んでいたかという問題です。毛沢東神話から脱却して文革を否定している中国とポル・ポト政権とは、イデオロギー的、社会体制的には水と油の関係にあると思うんです。鄧小平の中国が否定すべき、コミュニケーション的な、原始共産主義的なポル・ポトを支持すること自体おかしなわけですね。とともに、今回のインドシナ情勢全般に中国に誤算があった。中国の情報収集能力がまずいという面もあるんじゃないか。

ところが中国という国は、そういう状況になればなるほど

唯我独尊的になる。デスペレートになった状況と、たかがベトナム、という感じが同時にあるわけです。その中華思想的なものが中国をこういう行動に追いやってたんじゃないか。

矢野 ベトナム側から見ても中嶋さんの分析とまったく符合しますね。ベトナムはある意味では中国を非常に合理的に読んでいたと思います。日中条約が結ばれ、米中正常化が出来た。特にベトナムにとっては米中正常化は大変なショックだった。アメリカは巧妙にも、中国との正常化準備と、ベトナムとの正常化準備とを、同時進行的に進めていた。昨年十一月末の段階では、どっちに転んでもいいように両方の条件が熟していたわけです。それが中国側の働きかけによって、急遽、米中正常化のほうが実現した。つまりチャイナ・カードのほうが切られたわけです。それでベトナム側は非常にショックを受けた。

それはともかく、そのときにベトナムは、日中、米中正常化のあと中国は「四つの現代化政策」に専念するであろう、冒険主義的には出ないであろうと読んだ。それが一つ。

もう一つ。鄧小平はポル・ポト政権を評価していない。あれは「四人組」的政権であり、しかも国際世論において孤立している。あれほど非近代的・非人道的な、「人民寺院国家」とでもいえるような政権を、中国が、しかも鄧小平が支持するとはベトナムは思わなかった。

ところが、ベトナムとしては意外なことに、中国が苛しに

とどめず、具体的な行動としてベトナム領土に侵入してきた。ただ、意外ではあったけれども、ベトナムには受けて立つだけの余裕と賢明さがあつた。ご存じのように、ベトナムは正規軍の出兵を抑えたわけです。中国のイメージ・ダウンを狙うという作戦を取つた。その結果、中国はますますジレンマに立たされたわけです。限定作戦であつたはずのものがそうはできなくなつた。中国としては威信の回復を狙つて侵攻したわけですが、何をもちて威信の回復と言えるのか、中国自身も決めかねるわけです。

アメリカはこんどの中国のベトナム侵攻は事前に知つていたと、わたしはあらゆる状況証拠から判断いたしますが、アメリカも限定作戦だろうという前提で黙認した。けれども事態が意外に長引いたことによつて慌て始めており、大変な混乱が生じてしまつた。

### 社会主義の「制裁原理」

永井 わたしは長期的な観点から見てみたいと思ひます。鄧小平が「制裁」を加えると言つていて、実際に中国が行動に移つたというニュースを聞いたとき、わたしはすぐに、日中戦争で日本が中国を「膺懲」すると言つたのを連想しました。その背景には同じアジア人同士という仲間意識があつて、兄貴が弟を殴るといふ意識が含まれているんですね。今回もそれと同じですね。同じ社会主義国であるし、アジア人

である。そしてオレの方が偉い、と。

それから日中戦争も限定戦争のつもりで始めて、どんどん泥沼に引きずり込まれて、行き着く果ては太平洋戦争になつた。それも同じになる危険がある。短期決戦で決めるためには、戦闘地域を空間的に拡大してダメージを与えなければいけない。空間的に拡げれば泥沼に入らざるをえないというジレンマがある。行き着く先は中ソ全面戦争、これは最悪の事態ですが、理論的にはそこへ行く危険がある。

矢野さんは覇権関係の連鎖といひましたが、わたしは十五年前に「逆ドミノ」ということばを使つたんです。社会主義諸国家はヒエラルキーで構成されているんです。だから俗な表現を使うと、ソ連は中国を殴り、中国はベトナムを殴り、ベトナムはカンボジアを殴る。丸山真男氏の表現を借りれば、抑圧委譲原則。軍隊の中で士官が下士官を、下士官が初年兵を、初年兵が仕方なく馬を殴る。それを連想するわけです。

ではその背景はなにか。アメリカがインドシナ半島に武力介入することによつて、戦争は民族解放のゲリラ戦段階から通常戦争段階にエスカレートしたわけですが、その結果、北ベトナムを軍事・経済援助できる国が、中国から、近代兵器を提議できる国、ソ連にかわつていつたわけです。それと共に中ソ対立が激化し、一九六八年のソ連のチェコ軍事介入のとき、大方の予想を裏切つて、自主独立路線といわれたハノイがはつきりとソ連路線になつた。それを見てキッシンジャー

は、中ソ対立を利用してベトナム戦争を解決するという戦略的決定を行なったわけですが、その後、ベトナム戦争が終った段階では、『ニヤンゼン』の論説がソ連の援助によるとは書いても中国には一言も触れないといったことになる。

それから、中国が西沙群島を占領して、それをめぐって国境紛争の形で対立が続いている。西沙群島には大陸棚油田の問題がからんでいますから、七三年のオイル・ショック以来、米中ソとも、中東の石油地帯から大陸棚のオイル資源と安全保障の問題を結びつけた世界戦略を練っていたように思われます。

ところで、ではなぜ社会主義国家の間で武力行使の連鎖反応が起ったのか。わたしの持論なんです、根にはレーニンの思想があると思います。共産主義国家のイデオロギーは、一口に「マルクス・レーニン主義」と言われていますが、これはスターリン時代に、スターリンが帝国主義段階における社会主義革命のイデオロギーを指して規定したんですね。

しかしマルクスとレーニンは、言うまでもなくぜんぜん違う。マルクスは晩年になってこういつています。現在、軍事テクノロジーが非常に発達して、暴力革命は危険がきわめて高く、人民に非常な被害を及ぼす。またアメリカに株式会社が出来たところ、株式会社こそわたしの構想している西欧的な社会主義の理想であると漏らしている。彼は暴力革命を否定したわけです。ところがレーニンに至って社会主義思想とい

うものが根本的に交った。レーニンはフォン・クラウゼヴィッツの軍事戦略理論を徹底的に勉強して、クラウゼヴィッツの国家間闘争を階級間闘争に転化した。そして、フォン・クラウゼヴィッツの独創は恒久的な参謀本部をつくったところにあるわけですが、レーニンは革命を自然発生的なものではなく作爲的に計画して達成すべきものとして、参謀本部にあたる前衛共産党集団というものをつくった。階級闘争ということとは自国民に対して、軍事的戦略を適用することですから、恐るべきことになった。自国民および自国陣営内における武力行使もこの原理に従えば道徳的になんらやましいことではないということになった。同じ社会主義国のチェコに対してソ連が介入したときも、兄弟国だから高いモラルを要求する、制裁もシビアにやる。また中ソ対立における六八年から六九年にかけてのブレジネフ・ドクトリンもそうだったわけです、同じ社会主義国家には主権の対等・平等はありえない、とはっきり言った。だからそこにシビアな“制裁原理”がある。逆からいうと、同じ社会主義国同士ですら戦争するのだから、資本主義国へ侵略する可能性がふよいと考えるのは誤りなので、“内ゲバ”的行動が、社会主義権力に内在している、ということですよ。

中嶋 非常に興味あるご指摘で、わたしも基本的に賛成ですが、わたしの解釈を若干付け加えさせていただきますと、レーニンは民族自決ということを非常に強調しましたね。と同

時にレーニンは、ソ連内部の民族問題に触れて、「勝利したプロレタリアートは国境にこだわるべきではない」といった。そしてまた国家の死滅というビジョンを描いた。ところで、今日の社会主義はみな「勝利したプロレタリアート」なのですが、「勝利したプロレタリアート」が国境にこだわらなくてもよい状況というのは、国家の死滅というテーゼが実現してゆくのでなければどうしようもないわけです。ところがこの点をぬきにしてインタナショナルイズムつまり「万国の労働者団結せよ」という形而上学的なテーゼが、民族国家という実体をもちながら唱道された。

その矛盾のなかで、社会主義国同士が逆に、まさに国境にこだわるという異常な現象が出てくる。今回の状況を見てみると、まさに一種の宗教戦争ですね。相手を異端者と見る限り「制裁」を加える、という論理が働いている。したがって紛争処理のルールが見つからないわけですね。

### 動機は何か

中嶋 ここで問題をアジアに戻して考えてみたいと思います。昨年春以来の中越紛争をみますと大きな争点は国境と華僑の問題ですね。中国はこれを利用してベトナムの威信の増大を叩こうとした。そこまでは中国の目論見は成功していたかと思われた。ベトナムの脅威に怯えていたASEAN諸国は、それによって一時自信を取り戻した。そこに日中平和友

好条約が結ばれた。覇権条項を含んだ条約を日中が結んだということは、ベトナムにとって深刻だと思うのですが、もう一つこの条約には重要な側面があると思います。

それは中国の「四つの現代化」ということです。これは言ってみれば富国強兵策だと思ふのです。それを日本の政財界が、つまり今日日本が持っている大きな経済力が全面的にバックアップする姿勢が、日中条約以降出てきた。中国からの援助を断ち切られ、中国の脅威を感じているハノイにとっては、日中条約は単に国際政治の上で日本が覇権条項入りの条約を選択したというだけでなく、日本が中国の軍事的増強を支援する姿勢を示したと受け止めざるをえなかった。このことがハノイをしてソ連との平和友好条約の締結に踏み切らせたと思います。そしてソ連との条約があったからベトナムは高姿勢でカンボジアに介入した。またソ越条約があったから中国は当初慎重にならざるを得なかったが、ついにベトナム「制裁」の挙に出た。こう考えると、日中条約はある意味で今日のアジアを規定したともいえるわけで、そのことに対する責任意識の欠如が大変問題になるわけです。

矢野 いまのインドシナ周辺の情勢はいろいろな意味で悲劇的だと思ふのです。現在の紛争当事者を中国、ベトナム、カンボジア、ソ連といえますと、みなそれぞれ欠陥を持ってるのですね。だから、万事が「正義なき戦い」になる。

中国はカンボジアを支持していますが、これはあくまで保

ル・ポト政権を支持したということである。ボル・ポトとい  
うのはすでに指摘されたように正当性のまったくない政権だ  
ったわけです。それを中国はいまだに支持せざるをえない。

ではベトナムはどうかといえますと、ベトナムは、キッシ  
ンジャー、鄧小平などが指摘しているように、二枚舌、嘘つ  
きである。事実日本もだまされたし、ASEAN諸国もだま  
されたわけですね。ベトナムはそこに欠陥がある。

カンボジア人民共和国はどうか。彼らは自分の力だけでは  
国土を支配できない。ベトナム正規軍を十七個師団も導入し  
ないと国土を維持できない。

ここにソ連を加えると、ソ連は、外交力で介入できずに武  
力ではか介入できず、そこで秩序攪乱要因にしかならないと  
いう致命的な欠陥を持っているわけです。

さらにポイントを絞りますと、やはりこんどのインドシナ  
問題の焦点はカンボジアだと思えます。ブノムベンが陥落し  
た一月七日の段階で、中国がある程度涙をのんでボル・ポト  
政権支持を取り下げていれば事態はここまでこなかったと思  
いますが、いまは泥沼から脱け出す手がかりはない。カンボ  
ジアをめぐる国際委員会を作ろうとしても、現にカンボジア  
に二つの政権が存在する状況では、どちらを交渉のテーブル  
に出すかの交渉をまずやらなくてはならず、不可能です。わ  
たしは長期化せざるをえないだろうと思います。

永井 中国の意図ははっきりしている。周知のように、ベト

ナムは昨年の春から夏にかけて、いわゆる経済再建路線から  
カンボジアを叩く路線に変えたわけです。しかし、ベトナ  
ムには限られたマン・パワーしかない。だからかなり困って  
いるわけです。つまり中国はカンボジアに侵入したベトナム  
の軍事力を牽制するためにベトナムに介入した。カンボジア  
からベトナム正規軍が撤兵すること、ベトナムから中国軍  
が撤兵することを相殺することで解決しようとしているわけ  
です。ですから、どの程度引くかは別として、少なくとも公  
式の場でベトナムの撤兵がなされれば、戦略目標は達成した  
ということに引く。そのための限定侵攻だったと思う。

矢野 しかし、中越とベトナム・カンボジア紛争関係には質  
的な違いがありますね。第一に、ベトナム政権とボル・ポト  
政権を比べますと正当性のレベルがまったく違う。統治能力  
においても比べものにならない。二十年に及ぶインドシナ戦  
争を戦い抜いてきた現ベトナム政権と、「人民寺院的国家」  
とは勝負にならないわけです。第二に、中国は直接介入し  
ましたが、ベトナムは救国民族戦線というクツションをつく  
って介入し、現にそれを政権につけている。その意味で同じ  
正義なき戦いでも、正当性の水準に大きな違いがある。

永井 長期的に見ると、中国には朝貢国のイメージが伝統的  
にあって、革命後も、北京を中心に、朝鮮半島、インドシナ  
半島、インド、パキスタンと、周辺国を自分たちの保護国と  
いうイメージで見えており、反中の敵性国家の存在をゆるさな

い。それがあるから朝鮮戦争にも介入し、チベット、インドにも軍事行動を起した。誤算の度合いは今回が最もひどいようです。本質的には同じ行動だと思ふんです。

### アメリカのかかわり方

中嶋 アメリカはこんどの問題ではどう関わっているんでしょうか。

永井 SALT IIを前にデタントが失敗して米ソが対立することを非常に恐れる。これはバンス國務長官およびマーシャル・シュールマン路線です。ところが、ブレジンスキー、ホルブルックといった極東関係のタカ派は、「反ソ統一戦線戦略」の推進者たちで、多少國務省筋とちがう。ただ、中国の対ベトナム行動は限定的なものだろう。ソ連の直接軍事介入はあるまい。それでベトナムがカンボジアから撤兵するといふ「痛み分け」で処理できれば、ソ越条約の「名存実亡」のデモンストレーションにもなると読んで、黙認したのかもしれない。しかし國務省はつんぼ棧敷であったのか、困ったことになったというので、最近抑えにかかっていますね。

中嶋 アメリカは完全に分裂していると思います。カーター政権というのは、アジア問題を知らない人がアジア問題のブレーンになっている。今回の米中正常化も、ブレジンスキー、オクセンバークとかシュレジンジャーとかチャイナ・カードを使いたくてたまらなかつた人たちがやっている。國務

省はつんぼ棧敷に置かれていたようですね。アメリカ国内で「頭越し」をやっているわけです。

永井 アメリカはチャイナ・カードを使ったつもりで、アメリカ・カードを鄧小平に使われているわけです。鄧小平戦略というのは、内政との絡みで簡単に言うると、「四つの現代化」を達成するために、西欧、アメリカ、日本をユスルということです。つまり弱者の恐喝の典型ですよ。

中嶋 昨年の十二月初旬、いまから考えるとワシントンと北京がボールを投げあって決定的な段階にきていたころ、ご承知と思いますが、北京に「中ソ改善せよ」という壁新聞が出た。「鬼畜米英」と言っているときに、「アメリカに通ぜよ」といった発言をするようなもので、こんな壁新聞を一般民衆が自発的に出すわけがない。鄧小平がソ連カードをチラつかせることによってワシントンを牽制したわけです。

永井 ソ連に対してはアメリカ・カードを使うということですね。つまり、これ以上中越紛争が拡大して、ソ連が介入してくれば、中国は単独では抗し切れない。現在以上に日本や西ヨーロッパ、アメリカが中国を支援してくれなければ、中国は安全保障のためにソ連と和解せざるを得ない。これは明言するとしなにかかわらず、中国にある荷しです。

矢野 さきほどの話に戻しますが、あらゆる兆候から、アメリカはこんどの中国のベトナム侵攻を知っていました。最終的に黙認したのは二月十三、十四日の段階だと思えます。

アメリカは米中正常化まではベトナムと中国と同時平行的に正常化準備交渉を進めておりましたが、いったん米中正常化がなりますと、おそろしくベトナム不信に変わっております。それはなぜか。第一にアメリカのベトナム敗戦コンプレックスの揺り戻しがあります。これは大変強い。それから、ベトナムの外交スタイル、特にことばを他人を瞞着するためを使うやり方に対する不信。第三はやはり、ポート・ビーブル(難民)を出し、カンボジアに武力侵攻したということに対するアメリカ的反発がある。今年の一、二月段階でアメリカはベトナム腐憲論に固まっていたと、わたしは思います。大統領補佐官のブレジンスキー以下、まさに米中正常化を担ったスタッフがそうであったと思う。彼らの黙認のもとに、中国のベトナム侵攻が行なわれたとわたしは思います。

永井 タイのクリアンサク首相が二月四日にワシントンに行っていたでしょう。

矢野 彼がアメリカにむかって、中国のベトナム侵攻を認めると迫ったということが、あらゆる状況証拠から推測されます。クリアンサクが日本に来たときに、彼は大平首相と園田外相に、地図で、どのようにベトナムがカンボジアに侵攻したか教えている。そして、ベトナムの背後にはソ連がいる。次は間違いないタイである。この段階でベトナムを腐憲しておかないと、東南アジア全域が犯されると、しつこく迫っているわけです。同じことをクリアンサクはアメリカでやって

いるに違いない。アメリカは必ずしもそれに乗らなかつたけれども、タイの意向も無視できなかった。

永井 威信の問題ですね。タイとかASEANとかに対す中国の威信、これをなんとかしなければアメリカはどうしようもない。

矢野 そしてクリアンサクの随行団の一部がアメリカから至急バンコクに戻っています。クリアンサクは帰路また日本に寄っている。タイのアメリカ大使アブラモビッツも東京に来ていた、十五、十六、十七日と。

中嶋 タイはベトナムが怖い。ですがタイはもう中国が頼れなくなつたわけですね。ですから明白な中国離れをおこした。中国はタイを経由してボル・ポト派を支援することができなくなっている。カンボジアを支援しようとしても手だてがない。そうなりますと中国内政にも影響があるでしょうが、アメリカ国内においてもカーターのアジア政策に対する批判が出てくるんじゃないか。

永井 一九六九年のグアム・ドクトリン以来、アメリカは独占的な覇権国家としての政策から勢力均衡によるアジアの安定へと方針を変えてきたわけですね。それがフォードの七五年十二月の太平洋ドクトリンあたりから、徐々に反ソ統一戦線の方回で勢力均衡を達成しようという路線に移つていった。これには石油の問題がからんでいる。北京と交渉することによって大陸棚油田をメジャーが探査し採掘する、資本を

投資するのが重要だ、と。そしてカーター、ブレジンスキーははっきりと反ソ統一戦線戦略に移った。

ブレジンスキーが一番関心をもっているのは、アフリカの角といわれるソマリア、エチオピア、それとイランを中心とした中東とインドシナ半島。つまりインド洋周辺の三日月地帯と呼ばれている地域は社会構造的に脆弱であり、社会構造が崩れるところにソ連が進出してくるといったように、最も危険な地帯である。その三日月地帯の重心がイランだったわけですが、そこが崩壊した。これが決定的であって、カーター、ブレジンスキー外交は最大の危機に直面していると思えます。そしてインドシナ半島ではソ越条約、ベトナムの強大化。米国内では「何もしないカーター」に対するタカ派のつきあが強くなっている。

### 中国の動き

永井 中国内政に対する影響はどうですか。

#### 〈儲ける〉



きのう万馬券が出て大儲け、今夜はおごるぜとか、見通しは अच्छり、株でひと儲け、何でも買ってやるよとか大ハシヤギの人がいます。この儲けるといふことは、もともとは「用意する」という意味の古いことは「まづく」から転じ、蓄えて

中嶋 中国の内政は必ずしもはっきりしないわけですが、昨年十二月の三中全會が重要な問題を含んでいると思います。毛沢東批判が出はじめた時期から北京では政治工作會議が開かれていて、その一つの結論が三中全會であった。いわゆる文革右派が自己批判を迫られたわけです。文革左派は四人組として失脚したわけですけれども、華国鋒を中心とする文革右派が自己批判した結果、今日の中国はあらゆる決定的なポジションが全部復活幹部で占められている。文革のリアクションがいまの中国を動かしている。それだけに鄧小平は、そのリーダーとして、一瀟千里に「四つの現代化」路線を走らざるをえない状況にあると思います。

今回のベトナム侵攻についても中国の主流は全員これを支持していると見たほうがよい。前線司令官の楊得志は必ずしも鄧小平系列ではないけれど鄧の信任が最近特に厚いし、その背後にいる広州部隊司令の許世友は鄧小平が失脚時代、広州で鄧をかかまっていた人物で大変な実力者です。つまり今

用を待つ」という意味から金銭上の利益をあらわすことばになったといえます。だから、本来は、儲けるといふのは、不時の出費に備えて貯えておくということばですから、パツと飲むうよなんていうのはもつての他、なんだそうです。しかし、それじゃア、儲ける気にもならなくなりますよねエ。どう思います？

なら蓄貯形財

大和證券

回の一連の中国の侵攻作戦は「四つの現代化」という中国の主流と表裏の關係にある。

そこに今回の事件の深刻さがある。もしこれでうまくいかなかった場合、誰が責任をとるのか。鄧小平なり実権派のだれかが責任をとらされればすむという問題ではないんですね。うまくいかなければ、これからの中国をささえてゆくべきリーダーたちは総崩れになる。そういう意味では、中国にとってはまさに死活にかかわる問題になりつつある。

そこで中ソ全面戦争の危険ということを外部世界が高をくくっているのはよくないと思うんです。朝鮮戦争のときも、周恩来がパニッカー北京駐在インド大使を呼んで中国は介入するといったにもかかわらず、アメリカは最後まで高をくくっていたでしょう。今回も「制裁」をすと言って、そのとおりやった。中国はここ数年來、第三次世界大戦は必至だと言っているわけです。鄧小平もこのスローガンだけは下してないどころか、ますます鼓吹者になっている。

永井 ある意味では第三次大戦はすでに始まっているといってもいいかも知れない。

中嶋 しかもこの四月十一日までに、中国は中ソ友好同盟条約の廃棄を通告しなければいけないんです。日中条約交渉のときの日本との口約束にしたがって、これを通告するかどうか。今回の事態によってその通りにはできないんじゃないかと思いますが、それをやるとなると中ソ關係は極限的に悪化

するわけです。

永井 最後通牒ですね。

中嶋 そうなるとソ連はフリー・ハンドを得るわけです。中ソ友好同盟条約は三十年になんなんとするわけで、ともかくも世界戦争を回避させて来た戦後世界史が文字通り終るといふ今日の時期に、不気味な兆候を感ぜざるを得ない。

### 日本外交の進む道

矢野 私は、アジア・太平洋地域における日本外交は、あまりに悲劇的なことが多すぎると思うのです。もともと、アジア・太平洋地域には、大別して三つの特徴的なことがありまして、その第一は、政治のシステムと経済のシステムにズレがあるということです。このことに対する日本の対応は、経済のシステムだけを選択し、政治を留守にしています。これが第一の悲劇です。第二は、グローバルなシステムと、この地域特有のシステムにもズレが生じている点です。たとえば、ヨーロッパがデタラントならアジアは逆に緊張が高まるという關係にあって、そのどちらにも十分な対応ができていない。これが第二の悲劇です。そして第三は、アジア・パワーと太平洋パワーの關係です。アメリカがベトナムから撤退してのち、しばらくのあいだはアジア・パワーに真空状態が続きました。が、現在は、ソ連・中国・ベトナムが三つどもえになって新しいアジア・パワーを形成しようとして争っています。

そこへ日中平和友好条約を結んで介入したばかりでなく、事態を混乱させてしまった悲劇が、日本にはあると思います。同時に、アメリカが主張する太平洋パワーにも十分な役割を果たせない悲劇があります。

中嶋 ご指摘のとおりだと思います。日中平和友好条約は、まさに歴史的な選択でしたが、日本外交が無自覚であったことに対する代償として大きな拘束を受け、今その踏み絵をつきつけられているような気がします。たとえば、覇権条項にしても、今日のアジアの世界戦略のなかで、ソ印条約やソ越条約型の協議条項のアンチテーゼとして出されてきた背景を見ずに、お祭り気分条約を結ぶ。そうすれば中国と運命共同体的にうまくいくなどと情緒的に考える日本の外交は反省しなればなりませんね。特に中国は、反ソと「四つの現代化」の相関曲線をより鋭敏化させたいのですから、手段を選ばしませんからね。いっばうソ連は、だからといって単純に対日報復をするほどナイーブではないわけですよ(笑)。もつと

《レストラン》



レストランというのは、本来、西洋料理店を意味するものではなかったようです。

一七六五年、プーランジェという男が、パリに料理の店を出し、レストラン(元気を回復させるの意)というスープを売り出したところが、それ

グローバルな背景をもってリアル・ポリティックスのなかでダイナミックに戦略を練ると思うのです。その一が、ソ越条約。その二は、国後・択捉の軍事基地強化でしょう。ちょうど日本が覇権条項受け入れの方向に傾いた七八年春ごろから、国後・択捉の基地強化が始まったようです。

永井 それを七八年十月以降、決定的に強化していますね。中嶋 にもかかわらず、日本には、七〇年代初頭の米中接近以来、デタントがもたらした状況に対する根本的な認識の誤りがあります。今回の米中国交正常化はその総仕上げですから、それをデタントと感ずればいいかというところ、とんでもない状況があるのですね。アジアにおいては、相変わらず「なまぬるい戦争」が恒常化して、従来の冷戦構造とは、まったく異なる様相を呈している。

矢野 ですから、永井さんがおっしゃったような、第三次世界大戦はすでに始まっているという指摘がもしその通りだとすれば、日本にとってたいへんな刺激になりかねない。ソ連が大当り。ついに、スープの名が料理店の代名詞になってしまったのです。どうです。あなたも今夜あたり、花の都パリからやって来た有名レストランへでも繰りだして、豪華ディナーとしゃれてみては。元氣回復、氣力横溢となること請合ひ。もつともねエ、勘定書を見た後も氣力モリモリであるかどうかは保証出来ませんがなア。

貯蓄形財  
大和証券

の国後・扱捉の軍事基地強化を目的の当りに見ますと、日本の反心は短絡されて、防衛力を強化させたり、一気に軍国主義に走ったりしかねない。けれども、これは誤りで、この際こそ平和主義に徹すべきである、というのが、わたしの日本外交に対する第一の提言です。第二には、経済力だけで国際秩序が形成されるという単純な見方は放棄すること。そして第三に、先ほど指摘したアジア・パワーの形成過程には、絶対介入しないこと。むしろ、太平洋パワーのほうに限定して、ブラジルとかカナダ、オーストラリア、それにASEANとの友好を深めていくべきじゃないかと思えます。

中嶋 そうですね。しかし、そういうふうに言いますと、日本自身がパワー・ゲームをすればいいというふうに誤解されるむきもあると思いますが、そうではありません。そうではなくて日本をとりまく国際環境が、まさにパワー・ゲームとして展開しているのであって、この事実をまずリアルに認識することだと思えます。これが日本の平和外交の出発点にならなくてはなりません。したがって、全方位外交を表明したからには、少なくとも主体性をもって進めてほしいものですね。ベトナムがカンボジアに侵攻したとき、園田外相はベトナムに対する経済援助の凍結をいった。ところが、中国がベトナムに侵攻したときは何も言わない。全方位外交が泣きますよ。中国がベトナムから完全に撤兵するまで、日本は一切の経済協力をストップさせるぐらいのことを言うべきだと思

います。その主体性こそが、やがて対ソ外交において日本の確たる立場を形成することになると思うんです。

永井 私は、こういう感想をまず持つのです。「悔恨の世代」という有名な言葉がありますね。日独伊三国同盟など二連の歴史的选择を迫られたとき、日本の知識人は一様に沈黙し、傍観していました。その結果、敗戦という悲劇を見た。その「悔恨の世代」が、ふたたび戦火をまみえるようなことはすまいと心に誓った。しかし、私は、なぜそういう知識人が、日中平和友好条約締結のときに立ちあがらなかったか、と思うのです。やがてふたたび「悔恨の世代」になるのではないか、という気がしてなりません。

中嶋 確かに日本にとって深刻な問題ですね。

永井 なぜ、そういうことになっているかと言えば、わたしはいわゆる固定観念があるからだと思います。その第一は、「反ソ親中」ということ。確かにソ連は無骨で官僚主義で、ゴリ押しで、力が弱いとみれば強引に当たってくる、感情的にはわたしも好感は持てない。しかし、外交は理性ですよ。ソ連ほど首尾一貫した路線をとっている国は少なく、その意味では、予測可能な戦略的行動をとっているわけです。これに反して中国は、まったくマキアヴェリズムの極致といってよく、七二年当時には「日本軍国主義」と非難していたのに、近頃では防衛庁の役人も北京へ招かれている有様でしょう。「米帝」にいたっては、掌を返すようでしょう。例をあげれ

ばきりがありません。ユーゴスラビアとはよりを戻し、イラ  
 ンのパーレビ王朝には、わざわざ行って支持したり……。  
 中嶋 七一年までのアルバニアとは仲が良かったけれど、い  
 まは悪い、といったふうだね。

永井 とにかく、敵の敵は味方、昨日の敵は今日の友ですか  
 らね。ソ連にくらべれば中国は変り身が早く日和見主義的だ  
 と言えるのではないか。あえて言えば、中国ほど不確定で危  
 なかしい国はないとも言えますね。こういう「反ソ親中」の  
 固定観念が、さまざまな情報を処理する際に、相当働いてい  
 るのではないかと思うのです。そして、第二の固定観念は、  
 他国の行動に自国の観念を投射して予測する傾向です。ベト  
 ナムは、今、国内経済の再建に手いっぱいだからカンボジア  
 に侵攻するいとまがあるわけではないとか、中国は「四つの現  
 代化」で経済再建の時代だから、ベトナムに侵攻するはずは  
 ない、という固定観念があった。

矢野 外務当局もそうだけれども、戦後日本の国際感覚がよ

《エープリル・フール》



四月一日。この日は、天下暗れて？人をおかすい  
 でもいい日ですが、このエープリル・フールのは  
 じまりは、キリストがユダヤ人に馬鹿にされたの  
 を忘れないために設けた日とも、また一説には、  
 インドで三月二十五日から一週間、悟りのための

かれあしかれ独断的に固まってしまうている。

永井 そうです。戦後日本の、いわば「花より団子」という  
 経済合理主義的イデオロギーを他国に投射して予測しまし  
 ろうですね。これは財界人なんか強い固定観念です。それ  
 から第三の固定観念は、平和主義者とか進歩的知識人に強い  
 傾向ですが、社会主義勢力は平和勢力である、という考え。  
 そして第四は、外務省に特に強いことですが、自らの政策を  
 正当化するために、リアルな情勢分析をトーン・ダウンさせ  
 るという傾向。たとえば、先ほども中嶋さんが指摘したよう  
 に、国後・択捉のソ連の軍事基地にしても、十分そのことを  
 知りながら、あえて「ソ連は日中条約締結の報復に出たの  
 だ」と言われるのがいやなんですね。

中嶋 ひよっとすると、北方四島という領土問題がたんなる  
 日本外交の問題になりえなくなっただけか、もっと深刻な  
 状況になってきているというのにな。

永井 そうです、まったくそのとおりです。日中平和友好条  
 座禪が行われ、それが終る四月一日から、また凡  
 愚の迷いが始まるので、この日にからかいの行事  
 を行ったためだともいわれています。

さあ、今度はどんな手でおかすかどうかと苦心  
 しているのなら、あなたの場合それは簡単。この  
 日だけは、本当のことを言うことですよ、本当の  
 ことを。

財形貯蓄なら  
**大和證券**

約の締結の前に、『朝日新聞』で法眼元外務次官と討論したことがあるのですが、その折、北方領土を軍事基地化されミサイルで脅かされたらどうするのかと問うたら、彼は笑っているんですね。そんなことはあるまいと言つて……。ひどいものになると、ソ連の軍事基地の情報は何ら信頼性がない、なども放言していますからね。それは、とりもなおさず、ソ連には「日中」に報復する力がないという侮蔑というか軽視。それでいて、ソ連には根強い不信感がありますから、対ソ警戒は嚴重にするという一貫性のなさ。こういう傾向は戦前とまったく交らないですね。あまりソ連の戦略的反応を強調すると、お前は「恐ソ病」だと言われてしまうほどです。

ことほど左様に、日本自ら悪環境をつくり出すのに手を貸していながら、その環境に迫いつめられて、突然、日本もいよいよ核武装して軍事大国にならなければ、とうていアジアの危機に対抗できないと考える輩が出てくるんですね。

中嶋 そういうふうに短絡させますからね。これは危い。

永井 外務省はむしろ、ジャーナリズムも、今日、こうした状況になるという見通しを持たなかった。これは情ないですね。日本の外務省は三千人あまりの少ないスタッフで西ドイツやイタリヤの何分の一かのわずかな予算で全方位外交を維持しなければならぬ苦境もわからないわけではないのです。が、スタッフの数や予算の問題以前に、情報処理する観念そのものが問題だということに、なぜ気づかないのでしょうか。

か。もともと、日本の国益と外務省の省益(?)をアイデンティファイ(同一視)することはできないわけですから、この際、国益のために省益のプレステージを下げてかまわないから、今まで述べてきたような固定観念をとりはらうべきだと、私はあえて苦言を呈したいですね。

中嶋 外務省の中に、政党政治の派閥均衡ができているからそうなるのではありませんか。本来なら、今日のアジアの状況なり国際政治の修羅場をどのように擲み、どのような理論で外交を展開させるか、という考えをもった人たちが外交官になつてくれたらいいのですが、近ごろは……。

永井 お坊ちゃん、色白でね。(笑)

中嶋 下剋上はできない。自分たちが外務大臣になるのだという気概もない。コンティニューイティがないから責任も持ちようがない。これは日本の外交にとって、大問題ですね。

矢野 先ほど永井さんが指摘なさった、「社会主義勢力は平和勢力である」という固定観念ですが、今こそ日本は平和主義に徹しなければならぬ時期に、その平和主義者や進歩的知識人が、大きなジレンマに立っているのでは困ったことですね。わたしは、こういうときこそ、日本の世論は新しい平和主義の論拠を考ふる絶好の時期だと思つたのです。一步間違えば、明治に自由民権を唱えていた人たちが国権論を語るに至つたような危険がないとは言いがたいと思います。

中嶋 社会主義は軍国主義であるとかね。

昭和20年12月1日創刊 3種郵便物認可 昭和54年4月1日発行（毎月1回1日発行）1105号 昭和24年3月28日国隊官制特別紙承認証第440号

# 論公中央

緊急特集 **中越戦争と日本**

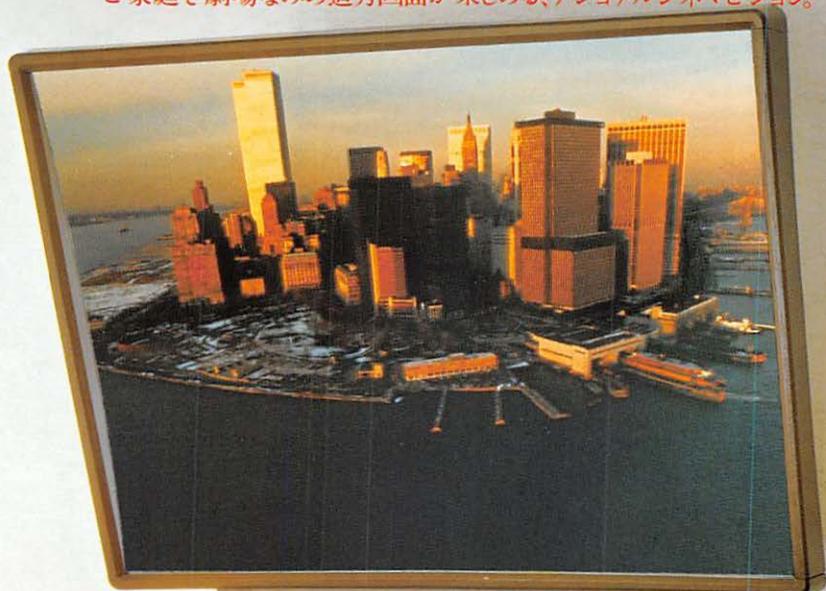
4月号



National

# おっ、大作シネマビジョン。

20型の約10倍もある60型の大画面。部屋を暗くする必要もなく、  
ご家庭で劇場なみの迫力画面が楽しめる、ナショナルシネマビジョン。



※画面はブラウン管とは異なり投写方式です。◆画面の写真はハメ込み合成写真です。  
●写真の他にお求めやすい50型もあります。TH-5000標準価格830,000円。

●カラービデオチューナ(別売)TU-60 標準価格110,000円 ●チューナラック(別売)TY-L61  
標準価格27,000円 ●ホームビデオ・マックロードSS(別売)NV-6600 標準価格279,000円  
60型TH-6100 標準価格1,250,000円(配送、設置調整、アンテナ機材、工事費別)

## シネマビジョン

ナショナルビデオプロダクツ

